

07年カツオ

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 量													
	漁獲	産地		輸入	輸出		東京	消費支出		消費支出	在庫	加工品		
	生	冷	生	生	冷	缶	生	生(円)	生(円)	鰹節(g)	缶	削	節	生利
18	328	79.0	220.4	50.5	52.6	0.1	12.9	1,365	350	33.0		21.1	38.7	3.7
19	329	72.9	224.2	31.4	55.8	0.1	11.8	1,248	361	30.0				
%	100	92	102	62	106	119	91	91	103	91		0	0	0

年	価 格						
	産地		東京	輸入	輸出	消費支出	消費支出
	生	冷	生	生	生(円)	鰹節	
18	234	131	479	92	94	2,106	930
19	275	163	527	133	146	1,892	1030
%	118	124	110	145	155	90	111

漁業・資源・漁獲

日本のカツオ漁業は、千葉以南の沿岸や伊豆諸島周辺で行われている曳縄を別にするると大別し一本釣りともき網に分けることができる。また、カツオの漁獲量の大半がこの2つの漁種により占められている。

昭和39（1964）年南方竿釣り漁業が周年操業化、同45（1970）年の開発センターの調査を境にして同49（1974）年に海巻き操業の本格化がみられ、漁場は南及び東方にも拡大し、10° S以北、155° W以西の中央～西部太平洋で広範囲に形成されている。更にインド洋（現在は撤退している船も多い）、タスマニア、ニュージー海域での操業もみられるようになり、その比較的豊富な資源量と品質の安定も加わり、特に海巻物は節業界にとっては輸入物と同様、貴重な加工原料となっている。

中西部太平洋のカツオの漁獲は、日本の竿釣り漁船による南方漁場（西部太平洋熱帯水域）の開発により1970年頃から全域にわたり本格化し、1980年代には各国のまき網船による熱帯水域漁場の開発も始まり漁獲量急増期に入った。1970年代まで40万トン台であった中西部太平洋での漁獲量は1990年代には100万トン前後に増大、さらに1998年以降には120万トン前後で推移し、2006年には暫定集計値で154万トンと、過去最高だった2005年の152万トンを約1%上回った。この間、竿釣り・まき網両漁業ともに、漁具の改良に加え、操業機器の開発・改良（低温活餌槽、海鳥レーダー、ソナー、人工浮漁礁(FADs等)と情報収集能力の向上(衛星情報、インターネット利用)が続いている。2006年の漁法別漁獲量(暫定値)では85%の131万トンがまき網漁業、竿釣りが約11%の17万トン、その他の漁業が6万トンとなっている。最近5年では、まき網漁業については日本・韓国・台湾・米国の遠洋漁業国が5～6割を占め、他はインドネシア、パプアニューギニア、フィリピンが多い。竿釣りについては、日本が6～7割を占め、他はインドネシアが多い。

中西部太平洋における主要まき網漁業(日本、米国、韓国、台湾)の標準化を行っていない単純なCPUEを見ると、米国および韓国の素群操業を除き、ほとんどの国/魚群性状において2006年のCPUEは前年よりも増加した。そのため操業群タイプを込みにした値でも2006年は前年よりも高く、結果として漁獲量が過去最高となった。

本資源は1980年代中期から高い水準が続いているが、現在資源水準は高位でその動向は横ばい、といわれている。

インド洋でのカツオ漁獲量は、1950年から1982年（西インド洋でのまき網漁業が本格化する以前）までは最大6万トン程度であった。1983年から漁獲量は急増し10万トンを超え、1992年には30万トンを、1994年には40万トンを、さらに2005年には50万トンを超えた。その後もほぼ50万トンを超える漁獲が続き、IOTC科学委員会の報告書に掲載されたデータによれば、2005年には53.0万トンの過去最大漁獲量を記録し、2006年については暫定値ではあるが59.6万トンと推定され、記録を更新しているようである。最近5年間（2002～2006年）の平均漁獲量は、51.4万トンと推定されている。漁業国としては、モルディブとスペインが10万トンを超え、次いで近年漁獲量が急増しているイランの漁獲量が多い。その他、インドネシア、フランス、セーシェル等の漁獲量は1万トンを越えていると推定されている。

最近の漁獲のうち約4割がEU（スペイン・フランス）とセーシェルを中心としたまき網漁業、約3割を流し網（主にインドネシア、イラン、スリランカ）、約2割をモルディブなどの竿釣りが漁獲している（図2）。全漁業種の漁獲量が増加する傾向にあるが、そのうち特にまき網漁業の漁獲増大の比率が高く、FADsの利用拡大によるところが大きい。現在ではまき網による漁獲のうち80%がFADsでの操業によるものである。インド洋における日本のカツオ漁獲は、その殆どがまき網漁業によるものである。

日本のまき網操業は、1978年からの海洋水産資源開発センター（現在：水産総合研究センター開発調査センター）による試験操業に始まり、現在も継続して行われている。民間船については、1989～2001年に操業を行っていた。その後同海域への入域は見られなかったが、2006年より再度入域して操業を行っている船舶もある。漁獲量は1992～1993年には3万トンを超えてピークに達したが、その後減少し、近年は1,500～3,200トンで推移している。

インド洋の資源は、現在資源水準は高位でその動向は増加傾向にある、といわれている。

また、国内供給問題では、昨年、大型竿釣船の10隻程度の休・廃業が実施されたが、燃油の高騰が一層激しくなり、今後の経営不安要素は消えていない。

本年のカツオの漁獲量は、32.9万トンであった。

産地水揚量と価格

19年の産地水揚量は、29.7万トンで前年（29.9万トン）並みであった。

内訳は、生7.3トン、冷22.4万トン（前年：生7.9万トン、冷22万トン）であった。

本年の生鮮（日本近海）の漁況は、釣りの初漁期（1～4月：犬吠埼以南の本邦南岸域漁場）は悪かった昨年を更に下回る低調さであり、こうした傾向は、漁獲対象をビンナガに切り替えた6月まで続いた。

黒潮前線を越えてから本格化する三陸・常磐沖での漁は、本年はまき網が極めて好調（6～8月）に推移し、近年では最も多い水揚げであった前年を上回った。しかし、竿釣りは、7月に少しまとまった程度で漁場も三陸沖とまき網より遠く、近年では最も少ない水揚げに終始した。

海域別漁獲量は、三陸64%（前年：62%）、常磐27%（前年：29%）、南西・東海0%（前年：1%）、九州西部3%（前年：4%）九州南部6%（前年：2%）であった。

本年も漁場形成の主体は三陸・常磐海域主体で、その他の海域での漁獲は低調であった。

南方竿釣りのカツオ（東沖を含む）焼津						海外まき網の状況（焼津）					
年次	単位		18年	19年	前年比(%)	年次	単位		18年	19年	前年比(%)
水揚隻数	隻	延	173	191	110	水揚隻数	隻	延	175	133	76
水揚量	トン	計	43,145	50,595	117	水揚量	トン		126,293	115,944	92
々	々	カツオ	35,062	38,015	108	1隻当たり	々		722	872	121
々	々	キハダ他	8,083	12,579	156	水揚金額	100		16,401	18,693	114
1隻当たり	々	計	249	265	106	1隻当たり	万円		94	141	150
水揚金額	100	計	10,354	11,419	110	価格	円/kg		112	146	130
1隻当たり	万円	計	60	60	100	水揚量	トン		101,721	93,805	92
価格	円/kg	平均	240	226	94	1隻当たり	々	カツオ	581	705	121
々	々	カツオ	218	207	95	価格	円/kg		112	146	130
々	々	キハダ他	334	283	85	水揚量	トン		22,341	19,972	89
						1隻当たり	々	キハダ	128	150	118
						価格	円/kg		210	228	109
						水揚量	トン	メバチ	2,127	2,098	99
						々	々	その他	104	69	66

冷凍カツオは、竿釣り（焼津）は南方が前年(2万3千トン)を上回る3万1千トン、東沖が前年(1.2万トン)を大きく下回る0.7万トンであった。一方、本年の海巻きは、カツオ、キハダ(キメジ)、メバチ(ダルマ)とも前年を下回った。これは、船の入港が少なくなったためである。

竿釣りビン長は「トロビン長」として回転すし等を始めとした外食産業・居酒屋等での需要増加もあってマーケットは定着している。本年は、秋口から冬場にかけての東沖(天皇海山)での漁は引続き不振であったが、上半期の伊豆列島周辺漁場での漁獲は昨年以上の豊漁となった。なお本年の釣トンボの水揚げは生鮮26,268トン(前年9,772トン)、冷凍12,021トン(前年7,075トン)であった。

なお、まき網によるビンナガの漁獲は生5,060トン(前年289トン)、冷134トン(前年22トン)であった。

価格は、生275円(前年234円)、冷163円(前年131円)と生は近海漁の不振、冷凍はバンコック相場の上昇により、何れも2年続きで堅調な推移が目立った。

消費地入荷量と価格

19年の東京消費地の入荷量は、生1.2万トンで前年(生1.3万トン)をやや下回った。

本年は産地での漁が盛り上がり欠けたことで初漁期から終盤に至るまで入荷がやや少なかったのが特徴。

近年カツオはB1製品の定着の中で市場外流通主体に「タタキ」や東沖「トロカツオ」等は周年商材として出回っているが、鮮魚としての出回りも年間を通じて昭和年代に比べかなり幅広くなっているのは変わらない。

本年は、特に近海竿釣り漁が低調であったことや冷凍魚も含めて2年続きの堅調な市況展開もあり、家計調査による消費は数量、金額とも昨年を下回った。

価格は、527円で入荷量の減少を反映し、前年の476円を上回った。

在庫量

なお在庫量は、3万トンで輸入の減少と輸出の増加もあり前年(3.3万トン)を下回った。

輸 出 入

カツオの輸出は、原魚と缶詰に分かれるが、缶詰輸出は既に国際競争力はなく、年々少なくなっており、輸出も僅かになっている。

本年は、原魚5.6万トン（前年5.3万トン）、缶詰148トン（前年124トン）で原魚は缶詰用として国内漁が平凡な漁の割には、円安や海外需要の高まりによるバンコック相場の急騰などもあり、前年を上回った。

輸入は平成年度に入ってから円高傾向もあって年々増加傾向がみられていた。これは節用需要の高まり（竿釣船のB1化に伴い国内の需要を満たしきれなくなった）で量、価格、品質とも安定している輸入物への依存度が高まっているためである。しかし本年は円安の定着や国際市況の高騰もあって、海外へ流れる量も多く輸入量は3.1万トンで前年（5.1万トン）をかなり下回った。

したがって輸入価格は、133円で前年（92円）を上回った。